

補綴再製をなくすためのポイントが詰まった好評書の第2弾！

『チェアサイドとラボサイドの連携が生む 質の高い補綴のための核心 24』を読んで

有限会社ケイエスデンタル（横浜市神奈川区）
菅原克彦 Katsuhiko Sugawara



佐野隆一 著
定価：7,040 円
(本体 6,400 円+ 10%)
A4 判カラー／120 頁
医歯薬出版株式会社 刊

前作『チェアサイドとラボサイドで共有したい 補綴再製をなくすための臨床テクニック24』の刊行から5年。同書を手にした方にとっては、第2弾となる『チェアサイドとラボサイドの連携が生む 質の高い補綴のための核心24』は、待ちに待った待望の一冊ではないだろうか。前作は非常に人気で、何度か増刷を重ねたと聞いている。

本書の著者は佐野隆一氏で、私も彼の大ファンである。なんといっても歯科技工への愛があふれているところが良い。

佐野さんに初めて出会ったのは、彼が主宰するスタディクラブD-Techniciansが活動し始めた2010年頃だったと記憶している。このグループは、歯科技工に情熱を注ぎ本気で楽しもうとする若手メンバーがたくさん在籍していて、歯科技工に対してみな真摯に取り組んでいた。彼はその時とんなら変わらない情熱を、今もまだ持ち続けている。また、大学で経済学を学んできたこともあり、経営的視点から歯科技工をみる数々の論文も発表している。さらには、歯科技工士養成校への入学者数の少なさが課題とされる中、養成校の非常勤講師を務め、授業内容の評判も良く、貴重な次世代の歯科技工士にも多大な影響を与えている。

本書には補綴再製、調整過多をなくすポイントが満載である。彼の日々の臨床が実に丁寧なのは、そこに本質があるからであろう。再製作が発生し

たときや、新たな仕事に行き詰まったときには、対象となるものや事象を真剣に謙虚に観察し続けること。例えば、歯科技工の現場では、あらゆる手を尽くしても思ったように質が向上せず、壁にぶちあたることがよくある。そんなとき、補綴装置のみならず機械や原材料、治工具に至るまで、工程全体を隅々まで観察し、素直な眼で現象をじっと見つめ直す視点が詰まっていて、そこに最大の解決のヒントを提示してくれている。先入観や偏見をもつことなく、あるがままの姿を謙虚に観察しているところが素晴らしい。

我々歯科技工士は、強みを活かしてモノづくりをしている。IT化によって、設備投資などが大変な時代であるが、顧客からの要望に対してはしっかりと応えていく必要がある。必要な課題を解決する工夫により技術が蓄積し、技術のレベルアップが図られ、問題解決につながってはじめてニーズに対応できると本書では述べられている。

現在、口腔内スキャナーが徐々に増え始め、デジタル歯科のイノベーションは目覚ましい。歯科技工も進化し続けることは紛れもない事実であり、フルデジタルへとシフトしつつある。だからこそ、デジタル技工・アナログ技工の見極めが大切だと強調している。歯科のデジタル化が急激に進むからこそ、デジタル化による問題点と解決策からデジタルラボの未来の考察もしてくれている。また今後も高齢化が進み、義

歯の需要が増え重要性が増すであろうことは周知のとおりであるが、彼は種類にとらわれない口腔内での補綴の重要性も示している。加えて歯科技工士だけでなく、歯科医師、歯科衛生士と価値観を共有したチームアプローチが大事だと提唱している。そして、良い補綴とは何かと常に考える。

仕事は周囲の事情を踏まえ、やるべきことには真摯に取り組む必要がある。問題解決のアイデアを持ちながらも、限られた時間の中で解決していくことは大変だろう。本書はそうしたときの一助になることは間違いない。デジタル化が進んだ今でもやはりコミュニケーションが大切であり、彼がこだわりのラボ名を「株式会社ラボコミュニケーションズ」にした所以であろうと推測できる。

歯科技工を楽しむ気持ちが大切で、高い価値を維持し続けることが真摯なコミュニケーションにつながっていく。佐野さんファンの歯科技工士はもちろんのこと、前作を読んでいない方や、歯科医師、歯科衛生士の方にも、この機会にぜひご一読いただきたい一冊である。